

春燈

July 2015

7
月号



主宰の句

安立公彦

良樹逝く灯下に春を数多遺し

(悼・良樹さん)

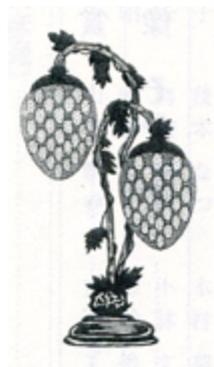
鳥雲に誠のみちを守り来て

(悼・敏子さん)

春惜しむ千住の由来もとほりつ

傘雨忌や顧みず来し道ひと筋

初夏や手擦れ親しき夕爾詩書



成瀬櫻桃子の句

無言館に母の絵多しつづれさせ

「春燈」平成十三年

第二次世界大戦で戦没した画学生の慰霊のため、遺作を展示している「無言館」に一步入ると自ずから身の引き締まる思いを持つ。特に母を描いた肖像画、母宛の黄ばんだ葉書や書簡が多い。先生はつづれさせを、万感の思いを籠めて季語に選ばれたのではないか。丘の上の簡素な美術館の隅でかぼそくなく虫の音。志半ばで散った学徒への鎮魂の句と思われる。

江草 礼

成瀬櫻桃子の句

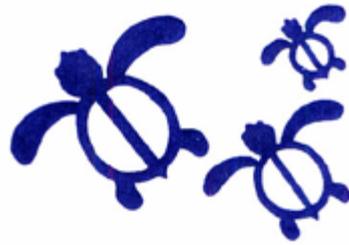
迎へ鐘逢ひたき人のありて打つ

『素心』昭和五十六年

「逢いたき人は生者でも死者でもない。生と死と、虚と実とを超越したところに一点の鐘の音がある。俳句は鐘の音だ」と櫻桃子著『古寺散策』の六道珍皇寺の項で述べている。櫻桃子師は鐘が好きで、あちこちの鐘の音を録音しておられた。次々と撞かれる鐘が響き渡る中、逢いたき人に思いを馳せながら長い列に蹤っていたのであろう。珍皇寺の鐘は取り分け心を揺さぶる。

武田巨子

燈下集



○ 西川保子

春昼の寺町通り猫の店

人つ子一人なき校庭のさくらかな

連句いま名残の裏や夕蛙

一豪邸春の落葉をふんだんに

揺れみたり逢魔が時の半仙戯

○ 上山永晃

あたらしきわれらが一步春の園 同人養足

梢までささやきふゆる木の芽雨

花期のばす静かな雨のつづきけり

このところ花に恋して老い忘す

万感の思ひを散らすさくらかな

○ 佐藤信子

持ち慣れし念珠の艶や西行忌

神官の白き影過ぐ藤の雨

藤棚を透かす日ざしや春日巫女

鳥帰る夕映ながき塔の空

逝く春を惜しみて閉づる句帖かな 〇

○ 片桐てい女

逃水は追ふな虚飾の愛と知れ

なにもかも尽くしし人に昭和の日

√⁵は「オウム」指す語や雪解富士

「タイドックロ對體」のいはれも鱒の焼くるまで

登山靴のまま焼香の列に在り

○ 山内四郎

金柑がびつしり通りがかりの家
菜の花や村の外れの一軒家
鶯の声のあたりに空がある
遥かなる氏神様の樟若葉
麦の穂の今出揃ひしばかりかな

○ 中村紀美子

のどけしやふちつぽ付きし泊り船
子規しのぶ球場跡や草朧(下野)
つくろへぬ鏡の鱗や花曇
花虹の重みに傾ぐ小花かな
漉餡のうすき甘みや暮の春

○ 浅木ノエ

てふてふの連綿体にとびにけり
すきとほる少女の耳や朝桜
独活きざむ本降りとなる夕べかな
よろづやの閉店看板よなぐもり
刺繡するひと色ひと色春惜しむ

○ 藤丸誠旨

散る花の掌のひとつらを妻かとも
口惜しき春惜しむことなく送る
行く春や小さき額の小さき顔
身をたたく抗癌剤や五月来る
新樹光仰ぎ余命のことなどを

○ 懸林喜代次

掌の草餅重しやはらかし
つばくらに子育て放棄無かりけり
山すみれ避けて据ゑたる水準儀
蔽摘む他に娛しみ無き夫婦
流觴の酒は伏見のどこの蔵

○ 豊谷ゆき江

文庫本捲る指先花の冷
夕東風や親孝行の長電話
雨上がる東宮御所や緑立つ
東京の西の外れや野蒜摘む
まだやまぬ雨のひと日や傘雨の忌

当月集

安立 公彦選



○ 小淵二美江

御手洗の水面揺れぬる花馬酔木

納骨の経読む僧や花の昼

荷積み待つ外国船や春の潮

長閑しや叩きかけをる音のして

爪立ちて幼児注ぐ灌仏会

○ 吉村さよ子

燕の巢見守る日々や夕灯

幸あれと「子」の字つく名や昭和の日

欄干をたたけばうつろ春暑し

本棚の写真古びる春夕焼

気に圧され揮毫者目守る夏隣

○ 後藤眞由美

葦立やひねもす強き海の風

逢へぬ日の想ひのいろの花衣

行合のさざなみ明り遅桜

紫木蓮ひとひらあだに反らしをり

夕星やひとしほ香る藤の花

○ 齋藤晴夫

風に舞ふ落花手に受く西行忌

涅槃図や足よりのほる老いの冷え

桜葉降るに余情はなかりけり

妻と待つ牡丹の苔今年いくつ

晩節の光と消ゆる別れ霜

○ 赤岡茂子

名園に蝶の出迎へありにけり

亭座敷水かけろふの春障子

朋友に呼び止めらるる花筵

花陰のバス停待たうか歩かうか

踏み惑ひ来し百歳の月おぼろ

春燈の句

安立 公彦選

葉桜の空となりたる通学路

東京 土屋 光男

風薫る自転車で訪ふ敦句碑

日の丸を眺めて気づく昭和の日
鳥獣戯画展上野の森の若葉時
首を振る張子のべこや沙羅の花

特急の通過の駅や新樹光

神奈川 河本由紀子

薫風や夢を探しに八十路旅

枇杷青しねむり全き水の神

片言の留守電消さず花は葉に

神奈川 河本由紀子

更衣街にあふるるクールビズ

十葉を踏みゆく闇のほひかな
でで虫や日暮のほひ濃き葉裏

おほどかに空にひろぐる祭笛

千葉 鶴岡 紀代

高きより伏し目がちなるえごの花

春昼や夫の机の捕虜日記
雨上り風船をつく姉妹

薫風に校歌預けて閉校式

三重 上野 進

誰がくれし筍糠を添へものに

南吹く仁右衛門島も遠くなり

またひとり孫殖えたらし鯉幟

樟若葉見上ぐる空の青さかな

葉桜のか黒き重き遊女墓

あんず飴出店のならぶ藤まつり

鎌倉に春の慈雨降る産女霊神（天巧寺）

神奈川 石田 康明

葱坊主何時のま此の期に及びしと

つくばひに若葉の影や手を洗ふ
鈴の緒の古りし稲荷や若葉風

東京 石原 節子



余言

安立公彦

揺れみたり逢魔が時の半仙戯

西川 保子

僅か十七文字の俳句作品が、人のこころを据えるのは、作者の視線が作者の心と互いに作用し合い、その結果生じる一句の表現というものに「魅了されるからである。

この句の場合、作者の視線はぶらんこに注がれている。その視線の据えたぶらんこを、作者の心は「半仙戯」と位置づける。多分公園の夕景であろう。その心が定めた半仙戯という言葉は、次第に作者の中で一つの情景をつくり上げ、背景である夕景を、「逢魔が時」とする。単なるぶらんこではない。作者は更にその半仙戯の状況を、「揺れみたり」と設定する。半仙戯の由来は先月号の「余言」で取り上げた。ここに来て一句は「逢魔が時の半仙戯」という靈妙な世界を展開する。句を見る人は、アップされた半仙戯にそれぞれの思いを抱くのだ。表現の妙と言うべきか。

灯台は白き女身や風光る

高橋 和女

灯台の任務は、場所の目印と、夜間の灯光を航路標識とすることにある。その歴史は古い。例えば犬吠埼灯台は明治五年、野島崎灯台は明治元年に着工とある。灯台はまた本来の任務の他に、地域のシンボルとして、訪れる人を愉ませる。更には灯台が詩歌の対象となっているのは、犬吠埼だけを見ても、佐藤春夫、徳富蘆花、吉田紘二郎、竹久夢二、高浜虚子ほか枚挙に遑がないほどだ。

この句はその灯台を「白き女身」と見る。程好い距離を於ての景がよく顕れている。非凡な表現である。

こんなにも素直になれる花の下

太田 慶子

桜の開花が待ち遠しいのは、日本人として万人に共通する思いだろう。二分咲き、五分咲きと咲き継ぐテンポの良さ。落花の景もいい。更には葉桜となる桜。

作者は今満開の桜の下に立ち、わが身の内から雑事が消えてゆくを感じるのだった。「こんなにも素直になれる」の表現はみごとだ。それは鑑賞する人の心にも通じる。

花の雨出会ひ別るる一世かな

（芭）佐橋 敏子

四月十九日、佐橋敏子さんが急逝された。その九日前に西谷良樹さんが亡くなられたばかりである。無常の一語しかない。六月号の出句は四月一日投函とあった。五句とも平常心の作だった。〈春満月心の遠出ゆるしけり〉の句も「心の遠出」という言葉はあるが普段の表現だろう。

掲出の七月号の句は、佐橋さんの句帳から、ご家族の方が書き抜いて出句されたもの。「出会ひ別るる一世」は真理である。佐橋さんはずでにそういう心境に達しておられたのか。今になってみると、そう思うしかない。ご冥福を祈るばかりである。

水音を辿るみくまり濃山吹

高埜 良子

この句の初見は四月本部句会だった。「みくまり」という古語を無理なく一句に取り入れている。言い方を替えると、この「みくまり」があつて一句は精彩を得ている、と言つていいだろう。古語辞典を引くと、「水分り」とある。水を配るという意味だ。山里に行くところという景は良く見る。点景としての「濃山吹」も適切だ。

毎月の出句の中には、古語を交えた作品が折々見受けられる。その古語がここに掲出した句のように一句に溶け込んでいるのなら申し分ないが、無理に押し込んだという表現の句が多い。句作に当たっては、十分に検討する必要がある。私たちの作っているのは現代俳句なのだ。

この国に生まれて生きて花月夜

清水 美子

毎年桜の咲く季節になると、地方によってはその枝に短冊に記した句を結んでいる所がある。三月末に訪れた西伊豆でもそうだった。こういう場所で短冊を目前に、花を見るのは好みではない。短冊を避けて桜を鑑賞した。

掲出句、まさに全ての同胞が抱く桜への思いだ。「この国に生まれて生きて」には、幼児のような無邪気な、そして直向きな思いが感じられる。桜に月のひかりは良く似合う。〈チチポポと鼓打たう花月夜 松本たかし〉。

追はるるごと生きし昭和や鳥曇

加藤 千春

老いたれば髪染めあげて花見かな

同

評者の兄は、今次大戦の末期、学徒動員で北九州の軍需工場に動員された。中学四年生だった。まさに「追はるるごと生きし昭和」と言えよう。この句を見てみると、そういう昔日のことが思い出されてくる。作者もそういう思いでこの時代を過ごされたのか。戦前戦中を生きて来た人たちには、「昭和」の文字が、単なる過去を懐かしむという思い以外の霜烈な厳しさで甦つてくる。

後句。桜には青春性がある。桜下に憩うと、ひと時気持ちの安らぎと昂りを覚える。この句「髪染めあげて」が、「老いたれば」とともに、思いの深さを表現している。